

山ノ神遺跡

——長野県塩尻市山ノ神遺跡
発掘調査報告書——

1988

塩尻市教育委員会

山ノ神遺跡

—長野県塩尻市山ノ神遺跡
発掘調査報告書—

1988

塩尻市教育委員会

序

山ノ神遺跡は、塩尻市大字片丘南熊井の現在、長野県畜産試験場が建つ台地上に位置し、以前より縄文時代早期から平安時代にいたる複合遺跡として知られており、過去においても数回発掘調査が行なわれてきました。この度、昭和59年度から当市内で開始されました長野県松本地方事務所所管の東山山麓地区農道整備事業が遺跡の一部にかかることになったため、工事施工に先立ち、埋蔵文化財保護の立場から塩尻市教育委員会に緊急発掘調査が委託され、市教育委員会では塩尻市誌編纂委員長の小松克己先生を団長に調査団を編成いたしました。

発掘調査は、秋本番の10月上旬から中旬にかけて行なわれました。調査の結果、出土した遺構、遺物は僅少でしたが、遺跡の範囲や性格を把握していく上で貴重な成果を提供することになりました。

終わりにあたり本調査に御理解、御協力を下さいました県畜産試験場および地元関係役員の方々、また献身的に作業に御尽力いただいた発掘調査参加者の方々など関係各位に深甚の謝意を表するものであります。

昭和63年2月

塩尻市教育委員会
教育長 小 松 優 一

例　　言

1. 本書は、昭和62年度農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業東山山麓地区に伴う、松本地方事務所と塩尻市教育委員会との契約に基づいて実施された、塩尻市大字片丘南熊井地区における山ノ神遺跡の緊急発掘調査報告書である。尚、昭和59年度に当市教育委員会より刊行された同事業に関わる(1985、『山ノ神遺跡』)は片丘南内田地区に所在する遺跡であり、本遺跡とは同名称の別遺跡である。
2. 調査経費については全額、長野県松本地方事務所からの委託金による。
3. 発掘調査は、山ノ神遺跡発掘調査団(団長 小松克己氏)に委託し、現場での調査は昭和62年10月3日から10月15日まで行なった。
4. 遺物および記録類の整理作業から報告書作成は昭和62年10月から昭和63年2月にかけて行なった。作業の分担は次のとおりである。
遺構…整理、トレース；鳥羽。
遺物…実測、拓本、トレース；小林、腰原。
図版組み…鳥羽、伊東、小林、腰原。
写真…鳥羽、伊東。
5. 本書の執筆は各調査員が分担して行ない、文責は文末に記した。
6. 本書の編集は鳥羽が行なった。
7. 本調査の出土品、諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

目 次

序

例 言

第Ⅰ章 調査状況

第1節 発掘調査に至る経過	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査日誌	3
第4節 道路の状況と面積	4

第Ⅱ章 遺跡周辺の環境

第1節 自然環境	5
第2節 周辺遺跡	7

第Ⅲ章 遺跡の概要

第1節 遺跡の概要	8
第2節 発掘区の設定	8

第Ⅳ章 遺構

第1節 小豎穴	11
第2節 ピット群	11

第Ⅴ章 遺物

第VI章 過去の調査経過	18
第VII章 まとめ	20

第Ⅰ章 調査状況

第1節 発掘調査に至る経過

昭和58年度から事業が開始された県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業東山山麓地区は、昭和59年度から塩尻市域へはいり、今年度の片丘南熊井地区の整備を最後に全線供用開始の運びとなる。この事業により設置される通称「山麓線」が通過する塩尻市片丘地区は松本平はおろか県内でも有数の遺跡稠密地帯であるため、塩尻市教育委員会は事業に先立ち長野県教育委員会と事業主体の長野県松本地方事務所の両者とともに埋蔵文化財保護の立場から現地協議を行なった。その結果、幸いにも路線がやや山沿いに設定されたため、対象外となる遺跡もあり最終的に塩尻市内では本事業により5ヶ所の遺跡が一部破壊を免れずに発掘調査による記録保存の形をとることとなった。この計画に基づき昭和59年度には片丘南内田地区的山ノ神遺跡において、また昭和61年度には片丘北熊井地区的今泉、竹ノ花、中原の3遺跡において発掘調査が実施され、記録保存が図られてきた。

事業最終年度にあたる今年度に残された片丘南熊井地区の山ノ神遺跡については、昭和62年5月15日、塩尻総合文化センターにおいて県教育委員会、松本地方事務所、市耕地林務課、市教育委員会の四者により調査箇所および日程についての協議がもたれた。この結果に基づき市教委は7月15日付で松本地方事務所から山ノ神遺跡発掘調査に関する委託を受け、9月2日、松本地方事務所、県畜産試験場、市教育委員会により発掘箇所の現地立合が行なわれた。市教育委員会は10月2日、当該調査を山ノ神遺跡発掘調査団（団長 小松克己氏）に再委託し、現場における発掘調査は、10月3日から10月15日に行なわれた。

発掘調査計画書（一部のみ転載）

1. 発掘調査地 塩尻市大字片丘南熊井
4. 発掘調査の目的及び概要 開発事業農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業東山山麓地区に先立ち150m²以上を発掘調査して記録保存をはかる。遺跡における発掘作業は昭和62年10月15日までに終了する。調査報告書は昭和63年3月25日までに刊行するものとする。
6. 調査に要する費用 1,000,000円
7. 調査報告書作成部数 300部

第2節 調査体制

團長 小松 克己（塙尻市誌編纂委員長）

担当者 鳥羽 嘉彦（長野県考古學会員、市教委）

調査員 小林 康男（日本考古學協会員、〃）

伊東 直登（長野県考古學会員、〃）

河原喜重子（長野県考古學会員）

小澤由香利（長野県考古學会員）

調査補助員 藤原 典明（信州大学学生）

龍堅 守（信州大学学生）

参加者 小沢甲子郎、桜井洋子、高橋鳥億、高橋阿や子、中野やすみ、小松義丸、
清水年男、小松幸美、小松静子、小松重久、山口仲司、保高愛子、小松鈴子、
松下おもと、藤松謙一

事務局 小松 優一（塙尻市教育委員会教育長）

清水 良次（市教委総合文化センター所長）

横山 哲宣（〃 文化教養担当課長）

三沢 深（〃 文化教養担当副主幹）

小林 康男（〃 平出遺跡考古博物館学芸員）

伊東 直登（〃 文化教養担当主事）

鳥羽 嘉彦（〃 文化教養担当主事）

第3節 調査日誌

昭和62年10月3日(土)快晴 発掘調査開始。参加者の受付終了後、担当者より日程および遺跡概要の説明。テント設営と周辺の草刈りを行なった後、調査区の東半部に幅2m、長さ39mのトレンチを設定し、助簾による表土剥ぎおよび遺構検出作業を開始する。出土遺物なし。

10月4日(日) 定休日。

10月5日(月)快晴 調査区西側に2m幅のトレンチを30m設定し、掘り下げを開始する。東半部のトレンチを拡張し、西側トレンチまでつなげる。

10月6日(火)雨 雨天中止。

10月7日(水)曇 遺構検出作業続行。最北端に溝状の落ち込みを発見し、その南隣りに建物跡を確認する。南端に数基のピットを検出する。土器片が僅かに出土する。

10月8日(木) 担当者用務のため現場作業中止。

10月9日(金)曇 溝を掘り下げたが出土遺物がなく、性格を把握することはできなかった。ピット群の検出作業。建物跡完掘。

10月10日(土) 定休日。

10月11日(日) 定休日。

10月12日(月) 小竪穴とピットの検出、掘り下げ。ローム層中の遺物を調べるために4ヶ所に幅50cmのトレンチ設定、掘り下げる。

10月13日(火)曇 小竪穴、ピット群完掘、平面図測図。写真撮り。調査区全体図の測図。

10月14日(水)晴 小竪穴とピット群完掘、平面図測図。写真撮り。調査区全体図の測図。
10月15日(木)晴 全体写真撮影。器材片付け、テント撤収。本日をもって現場における作業を終了する。

第4節 遺跡の状況と面積

遺跡名	場所	現況	種類	全体面積	事業対象面積	最低調査予定面積	調査面積	発掘経費
山ノ神	塩尻市大字 片丘南熊井	畠地	包蔵地	135,000m ²	1,000m ²	150m ²	860m ²	1,000,000円

第1表 発掘調査経過表

月 遺跡名	10	11	12	1	2	主な遺構	主な遺物
山ノ神	発掘	遺物整理 図面作成 原稿執筆				小堅穴 ピット	5基 10基 縄文中期土器片 黒曜石片

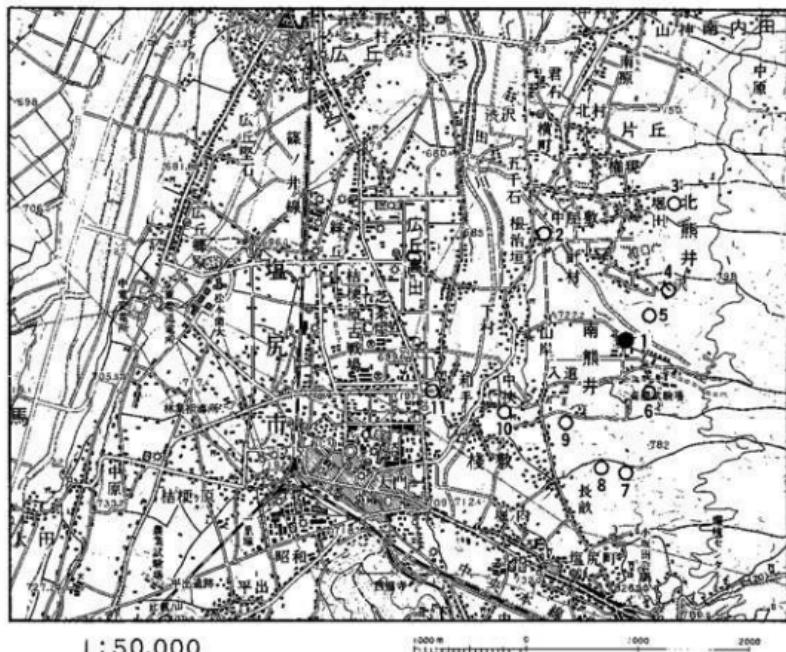
(事務局)

第Ⅱ章 遺跡周辺の環境

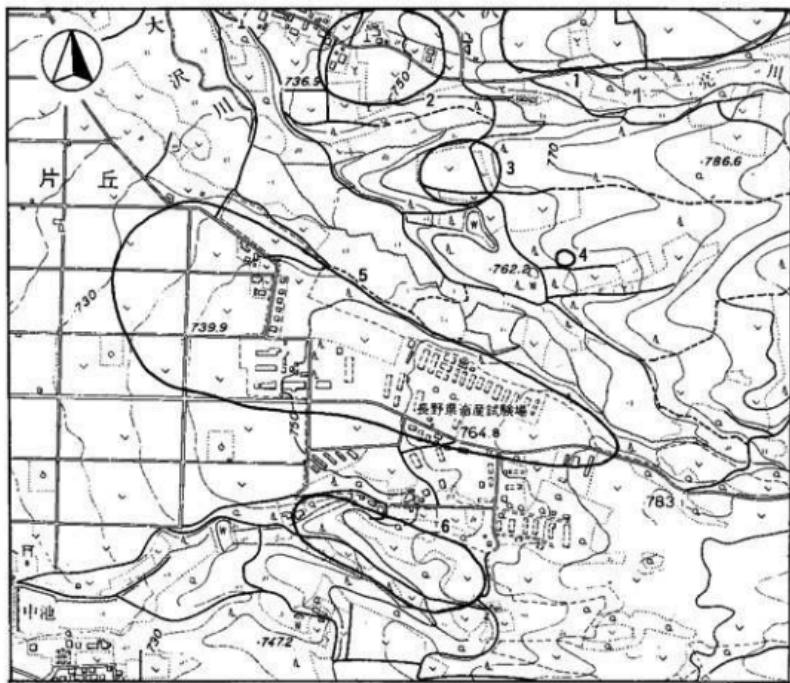
第1節 自然環境

山ノ神遺跡は塩尻市の方東、片丘南熊井地籍にあり、現在、長野県畜産試験場が建つ台地上に広範囲に展開する。

ここは高ボッチ山塊の西麓斜面に発達した片丘丘陵上にあり、平均勾配6'の急斜面を西へ向けている。このため山麓から流下する数条の河川による開析は著しく、台地縁から断崖をもって沢に臨む場合が多い。またこれらによって形成された台地上には、群小の河川により幾多の小扇状地が形成されており、複雑な複合扇状地形の形態を示している。



第2図 山ノ神遺跡位置図



1 : 10,000

1. 中原 2. 大沢 3. 稚原 4. 岩瀬沢 5. 山ノ神 6. 龍神

第3図 遺跡範囲図

山ノ神遺跡の立地する台地もこのような複合扇状地となっており西へ緩く傾斜している。台地の北側は急な崖をもって谷に臨んでおり、下方に大沢川が比較的豊富な水量で西流している。また南側には現在こそ表流水は流れていないが河川の浸食による浅谷地形が残されており、やはり古代における水の存在は十分に考えられる。

台地の北側には大沢川を隔てて稚原遺跡の占地する舌状台地があり、さらにその北隣りには牛壳沢川を隔てて昨年、同事業で発掘された中原遺跡や大沢遺跡を乗せる台地が存在する。また南側の丘陵上にはやはり昨年、畜産試験場内造成事業に伴い発掘調査が実施された龍神遺跡が展開している。

調査地区は遺跡の北西隅に位置し、大沢川を臨んでいる。微地形的にはやや西北西へ振る小尾根上にあり、日当たりのよい緩斜面である。標高は750mである。

発掘区を設定した台地上には、厚いローム層を基盤として上位に暗褐色土（表土）が被覆している。層厚は台地中央寄りで約40cmを測るが、台地縁辺部では薄層となり約10cmを測るにすぎない。従って発掘区域では覆土の保存状態があまり良好とは言えず、擾乱が著しかった。

第2節 周辺遺跡

松本平東南部を走る筑摩山地から田川流域にかけては有数の遺跡稠密地帯となっており、毎年行なわれる幾多の発掘調査により、その様子は徐々に明らかになってきつつある。以下、時代を追ってこれらの遺跡を概観してみたい。

先土器時代では小丸山、赤木山、丘中学校、向陽台、青木沢、柿沢で遺物が出土しているが、近年目ざましく資料が発見され、新知見が増えている分野である。

縄文時代早期では八窪、向陽台、福沢、堂の前で住居址や集石などの遺構が発見されているほか、本遺跡の周辺でも須原、竜神で押型文土器が得られている。

前期になると片丘地区だけでも中原、舅屋敷、竹ノ花、小丸山、八幡原、大林、富士塚、女夫山ノ神など多くの遺跡がある。前後2回にわたり調査された舅屋敷では10軒の住居址のほか小堅穴42、集石遺構とともに多量の土器、石器類が出土し、中原では住居址1軒、女夫山ノ神では初頭の住居址1軒と末葉の住居址3軒が確認されている。

中期にはいると遺跡は急増し、先述した筑摩山地西麓の各複合扇状地や小舌状台地の上には遺跡が濃密度で分布しており、大集落がいたる所に所在していたことを伺わせる。中でも本遺跡の北隣りの舌状台地に占地する須原では、中期のほぼ全期にわたる計147軒の住居址が円環状に露呈された。さらにその北東隣りの中原では勝坂期1軒と加曾利E期3軒の住居址が、小丸山では勝坂期5軒と加曾利E期9軒の住居址がそれぞれ確認されている。

後、晩期の遺跡はこの地域でも例にもれず急減し、片丘地区では君石で若干の土器片が出土しているのみで、あとは松本市のエリ穴、石行、別方などの僅かな遺跡が知られる程度である。

弥生時代では生活域が田川流域に移行していく。田川端で40軒の住居址が発見されたのをはじめ、向陽台、中挾、和手、丘中学校、中島で住居址、方形周溝墓が確認されている。

古墳時代では白神場で住居址が検出され、竜神平では祭祀遺物が出土している。

平安時代になると吉田向井で85軒、丘中学校で5軒、丘中学校南で15軒、君石で1軒、舅屋敷で6軒、内田原で18軒、須原で19軒の住居址が検出され、その他にも花見、高田、野村、一夜窪、吉田川西、別方、渋沢、境沢、矢口、久保在家、鍛冶屋、弁当原、無量庵、二本木、今泉、和手、中挾などかなりの濃密さをもって所在している。

(鳥羽 嘉彦)

第III章 遺跡の概要

第1節 遺跡の概要

今回発掘調査の対象となった山ノ神遺跡は、塩尻市大字片丘南船井地籍にあり、現在、県畜産試験場の建つ台地上に展開している。

当遺跡では過去2度にわたり発掘調査が行なわれており、昭和32年に実施された発掘調査では縄文時代中期後葉の堅穴住居址が2軒検出されている。また昭和60年に中央道長野線開通で実施された緊急発掘調査では先土器時代の黒曜石ブロックと縄文時代中期中葉の堅穴住居址がやはり2軒検出されている。この他にも採取遺物は多く、長野県史には他に縄文時代早期、同後期および平安時代の遺物の出土記載がみられ、かなり長期にわたり、この台地上に人々の生活跡が残されていることを物語っている。

今回の調査は、台地の一部を道路用地が横切ることになり、工事に先行して実施されたものであるが、遺跡の中心地からはかなり離れた北西縁辺部にあるため、当初から多くの成果は期待できなかった。調査面積は860 m²である。

調査の結果、遺構としては小堅穴5基、ピット1基が調査区南端部で検出された。これらの遺構からは遺物の出土は皆無で、時代その他性格などについては不明であった。遺物も縄文時代中期の土器と黒曜石片が僅かに出土したのみで、流れ込みによる搬入の可能性が強いものであった。これらの結果から調査地区はやはり遺跡の縁辺部であるとみてよいだろう。

第2節 発掘区の設定

道路用地は昨年度、発掘調査が実施された中原遺跡の占地する台地から大沢川へ降り、再び山ノ神遺跡の占地する台地上へ上がり、県畜産試験場敷地の西縁をかすめて中央道長野線側道へ連絡する。この地区は遺跡の中心からはかなり外れており、また事前調査により畜産試験場の旧本館付近は造成によりかなり破壊を受けていることが判明したため、台地北縁部にあたる現在、畠地に利用されている箇所に調査区を設定することとした。ここは緩く北西方向へ傾斜した斜面で、調査区の北側は段崖をもって大沢川の谷を臨んでいる。

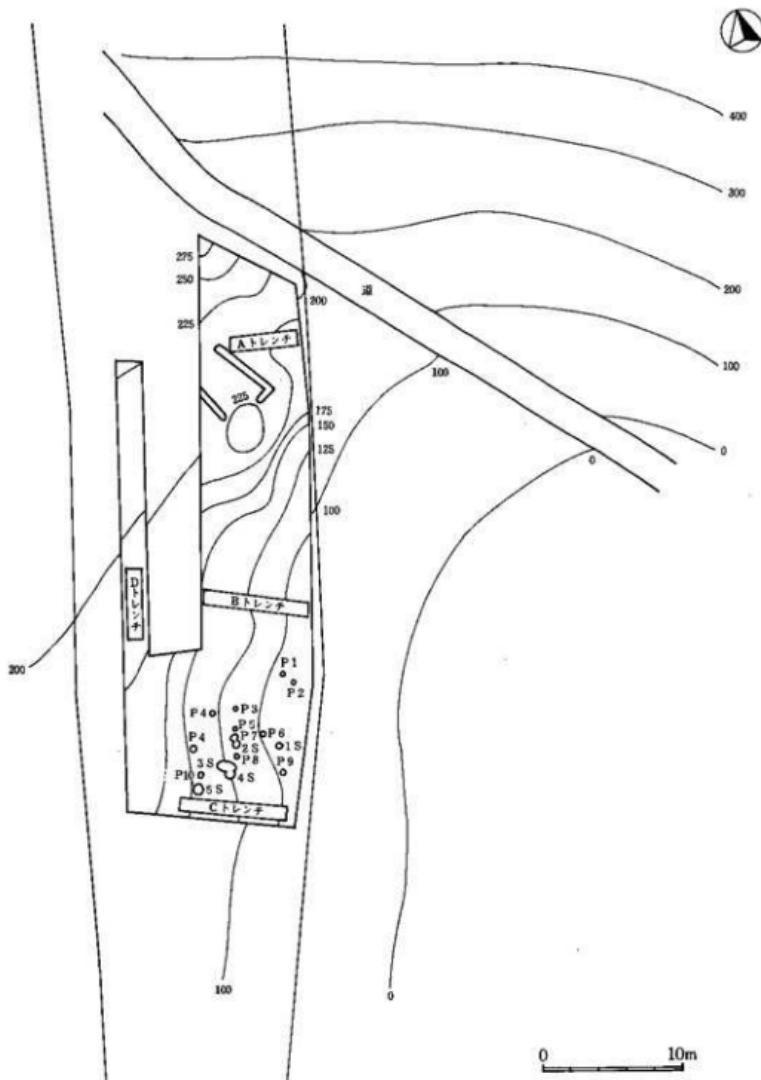
発掘調査に先立つ試掘調査によれば、調査区北側では約30 cm の表土の堆積をみると、中央から南側にかけては褐色のローム面まで10~15 cm を測るにすぎない。このため耕作等による覆土の搅乱は著しく、ローム層中にまで及んでいる箇所もあった。

調査は、道路用地の東側と西側にそれぞれ幅7 m と2 m のトレンチを設定し掘り下げていき、小堅穴およびピット群が検出された南側は2本のトレンチを拡張してつなげた。また調査過程で先土器時代の様相を把握するため幅1 m のトレンチを4本(A~D) 設定した。

(鳥羽 嘉彦)



第4図 調査地区図



第5図 山ノ神遺跡造構全体図

第IV章 遺構

第1節 小竪穴

今回の調査で、小竪穴は計5基が検出された。いずれも調査区の南端に偏在した状態で確認されている。第3号小竪穴と第4号小竪穴が一部重複しているほかは、最も隣接する小竪穴にそれぞれ2m前後の間隔を持っている。平面形は、第3号小竪穴が橢円形を呈する以外、いずれも円形で、断面形はすべてタライ状となっている。掘り込みは緩やかな傾斜をなし、底部は堅くはないが平坦になっている。平面規模は、第1、2、4、5号小竪穴については直径50~70cmを計り、第3号小竪穴は126×69cmである。深さは、第5号小竪穴が最も深く、39cmを計る。覆土は、いずれも暗褐色土を主体としている。

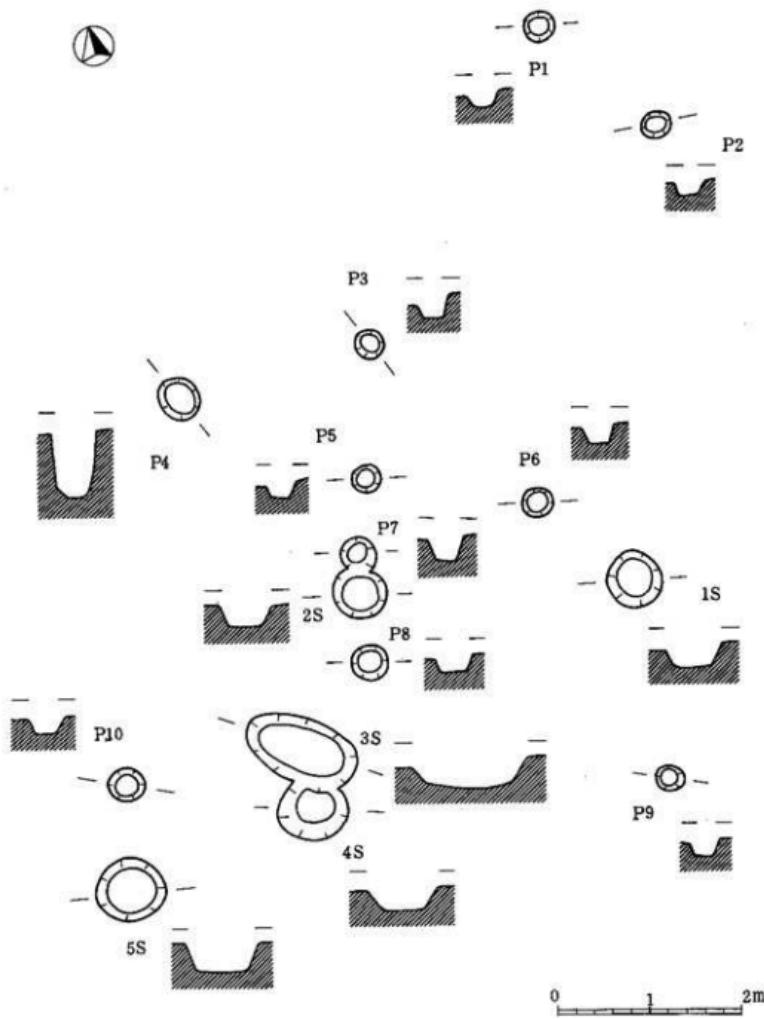
以上、概略を記したが個々については第2表を参照されたい。

第2節 ピット群

計10基のピットが検出された。これらはいずれも調査区南半の南寄りにあり、小竪穴の存在する範囲をやや上まわる範囲に集中して確認された。平面形はいずれも円形を呈し、直径20~45cmを計る。断面形は、ほとんどが緩やかな傾斜で掘り込まれたタライ状で、深さ15~28cm程度の比較的浅いものとなっている。この中で、P4が特異性を示し、直径45cmの平面規模で、深さ73cmと、近在する小竪穴も含めて最も深い断面コップ状を呈している。覆土は、小竪穴と同じく暗褐色土を主体としている。

以上、概略を記したが、個々については第3表を参照されたい。

(伊東 直登)



第6図 小豎穴・ピット群

第2表 小豊穴一覧表

No	確認規模	平面形	主軸方向	断面形	底面規模	底面	深さ	備考
1	60×50 _{cm}	円	N-85°-E	タライ状	40×36 _{cm}	平坦	24 _{cm}	
2	55×50	円	N-80°-E	"	38×37	"	22	
3	126×69	橢円	N-55°-W	"	98×48	"	27	
4	77×—	円	N-70°-W	"	40×35	"	11	
5	76×70	円	N-80°-W	"	52×53	"	39	

第3表 ピット群一覧表

No	確認規模	平面図	主軸方向	断面形	底面規模	底面	深さ	備考
1	34×33 _{cm}	円	N-70°-W	タライ状	20×19 _{cm}	平坦	18 _{cm}	
2	32×30	"	N-65°-W	"	21×18	"	15	
3	31×31	"	N-27°-W	"	20×19	"	28	
4	45×45	"	N-18°-W	コップ状	30×30	やや丸底	73	
5	31×30	"	N-73°-W	タライ状	19×19	平坦	16	
6	34×32	"	N-75°-W	"	23×22	"	20	
7	40×38	"	N-65°-W	"	20×23	"	23	
8	40×40	"	N-70°-W	"	24×23	"	17	
9	20×18	"	N-65°-W	"	18×17	"	17	
10	40×37	"	N-60°-W	"	24×23	"	18	

第V章 遺 物

今回の発掘調査で得られた遺物には、縄文土器片、黒曜石片があるが、量的には極めて僅少であった。山ノ神遺跡は、過去において各所で発掘調査が実施され、住居址の検出とともに、多くの遺物も得られている大遺跡である。現在でも、調査区隣接地域からは多くの遺物が採集可能である。今回は面的な調査のため、この地域の全体像を把握するための資料に乏しいことから周辺地区から採集した遺物もあわせて紹介し、遺跡の性格を把えてみたい。

土器 調査区内からは7図1～4の4片が図示できるだけで大半は小片である。1は隆帯と沈線を、2は沈線と縄文を施したもの。3は底部破片で、網代痕が認められる。4は条痕を施したもの。1、2は縄文中期後半に、4は縄文晩期～弥生中期初頭に位置づけられよう。

8図、9図は隣接した地域から採集されたものである。1は、口縁部破片で、口辺に縄文を施し、2はこの胴部であろう。3は結節縄文を施す。4は、外に張り出した底部。1～4は縄文中期初頭に位置づけられる。5、6は浅鉢形土器で、口縁内面に押引文、キャタピラ文を付す。7～13は、隆帯とキャタピラ文を組み合せたものである。14、15は口縁部で、沈線による锯歯文、縄文、押引文を施す。5～13は、新道式、14、15は藤内I式に属しよう。16、17は隆帯による渦文、区画、その内部への沈線を加えたもの。18～25は、渦巻文の隆帯間に平行沈線を充填したもので中期後半曾利期に該当しよう。27は鞍杉条文をもった曾利V式に比定される。28～31は、口縁部破片で、隆帯による区画内に縄文を充填している。32～34は、沈線による蛇行する懸垂文と縄文を施す。

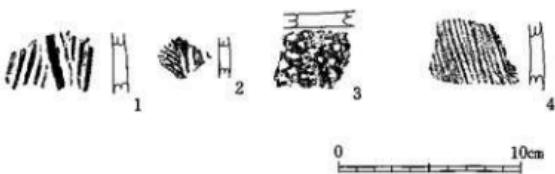
今回の調査区およびその周辺から得られた土器は、縄文中期全般にわたっている。

石器 調査区内からは剥片のみで、図示できるものはない。調査区外からは多くの石器が採集されている。10図がその一部である。

1は、チャート製の横型石匙。調整は丁寧である。2は、分厚い刃部を有するエンドスクレイバー。刃部の作出は粗雑である。縄文中期としては類例に乏しい。3は、左辺に刃部をもつ不定形石器。4は、ビエス・エスキーユ。黒曜石片は多く採集できるが、定形的な石器は僅少である。5～7は、打製石斧。5は肩部にくびれを持った撥形。6、7は短冊形を呈する。打製石斧は、この他にも多量に得られている。大半が粗雑な作りの短冊形である。8は、縁辺に加工を施したもので、スクレイバー的機能を有するものであろう。9は、尖頭部を意図的に作出したもので、尖頭状石器とでも呼べるものである。中期の遺跡で、しばしば認めることができる。10～12は凹石で、ともに打痕の集中による浅い凹を有する。10、12は磨石との兼用品で、研磨度が顕著である。13は、穀擦石と呼称される特殊磨石の半欠品。三角柱の一先端に幅2.5cmの磨面をもつ。磨面の左辺は、打削痕が著しい。

採集された石器群からは、縄文中期遺跡の典型的な在り方を示している。

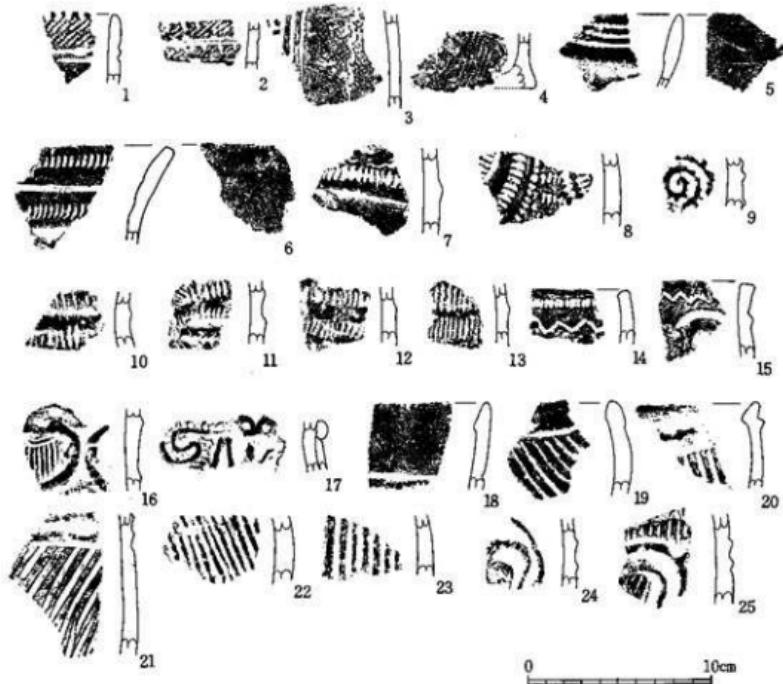
(小林 康男)



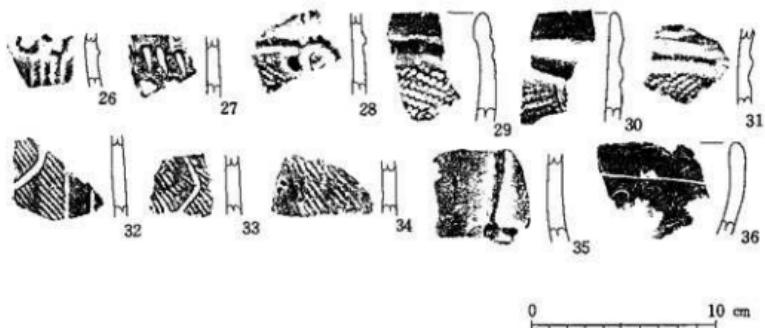
第7図 調査出土土器

土器觀察表

番号	器形	部位	文様構成要素	内面調査	胎	上	備考
1	深鉢	肩	沈線 織帯	ナデ	長石		
2	"	"	織文	"	"		
3	"	底	網代	"	砂粒		
4	?	側	朱灰	"	石英 砂粒		



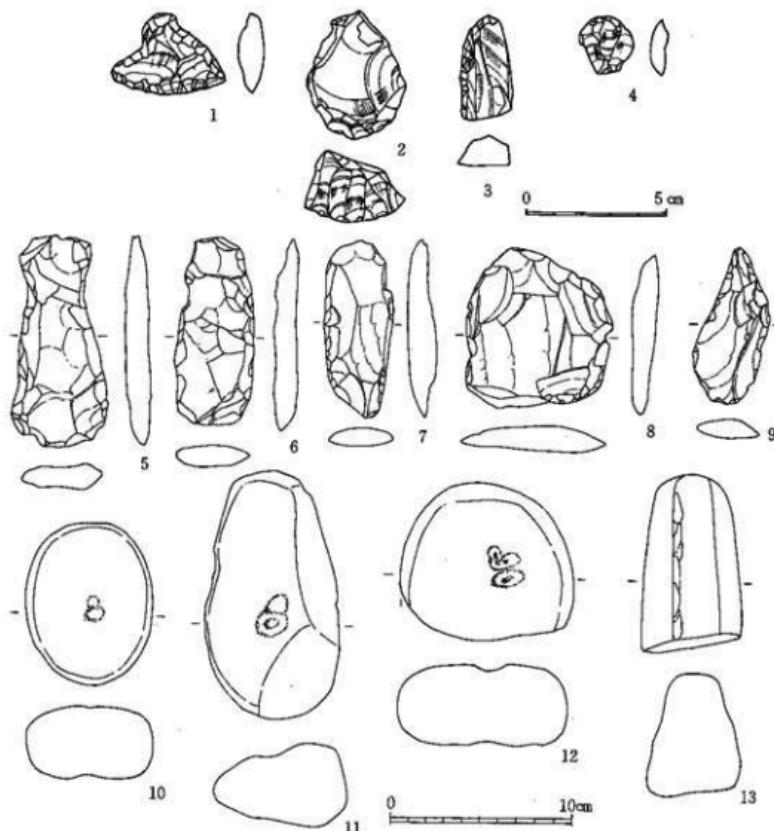
第8図 景徳鎮地区採取土器(1)



第9図 隣接地区採取土器(2)

土器観察表

番号	器形	部位	文様	機成	要素	内面	調整	胎	土	備考
1	保鉢	口縁	縞文	沈締	口縁に丸み	粗	長石			
2	ク	胸	ク	ク	刺突	ナデ	ク			
3	ク	ク	ク	ク		ク	ク	雲母		
4	ク	ク	ク	ク		ク	ク			
5	浅鉢	口縁	キヤタビラ	(内面)		ミガキ	ク	雲母		
6	ク	ク	ク	ク	押引	(ク)	ク	ク	ク	
7	深鉢	胸	ク	隆帯	沈締	ナデ	ク	ク		
8	ク	ク	ク	ク		粗	ク			
9	ク	ク	ク	ク	刺突	ク	ク	ク		
10	ク	ク	ク	ク	押引	ク	ナデ	ク	雲母	
11	ク	ク	ク	ク		ク	ク	砂粒		
12	ク	ク	ク	ク		ク				
13	ク	ク	ク	ク		粗	長石			
14	ク	口縁	ク			ナデ	ク			
15	ク	ク	縞文	隆帯	沈締	ク	ク	砂粒		
16	ク	胸	ク	隆帯	沈締	ク	ク			
17	ク	ク	ク	ク	押引	ク	ク			
18	ク	口縁	沈締			ク	ク	石英		
19	ク	ク	ク			ク	ク			
20	ク	ク	ク	ク	隆帯	ク	ク			
21	ク	胸	ク	ク		ク	ク	砂粒		
22	ク	ク	ク	ク		ク	ク			
23	ク	ク	ク	ク		ク	ク	石英		
24	ク	ク	ク	ク	隆帯	ク	ク			
25	ク	ク	ク	ク	沈締	ク	ク			
26	ク	ク	ク	ク		ク	ク	雲母		
27	ク	ク	ク	ク	沈締	ク	ク	長石 砂粒		
28	ク	ク	ク	ク	隆帯 縞文	ミガキ	ク			
29	ク	口縁	ク	ク		ク	ク	ク		
30	ク	ク	ク	ク		ク	ク			
31	ク	胸	ク	ク		粗	ク			
32	ク	ク	ク	沈締	ク	ナデ	ク			
33	ク	ク	ク	ク		ク	ク	砂粒		
34	ク	ク	ク	ク		ク	ク			
35	ク	ク	ク	ク	隆帯	ク	ク	石英 砂粒		
36	ク	口縁	沈締	縞文		ミガキ	ク			



第10図 騒接地区採取石器

石器観察表

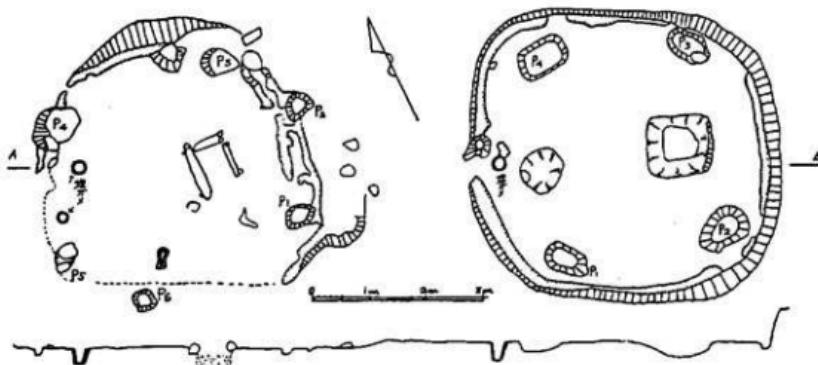
番号	造 構	種 別	石 質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特 徴
1	区外表抜	石芯	黒曜石	28	49	9	7.6	
2	ク	スクレイパー	チャート	45	35	23	26	
3	ク	ク	黒曜石	36	19	9	7.7	
4	ク	ビニスエキナース	ク	20	20	6	2.3	
5	ク	打製石斧	頁岩	112	51	14	89	
6	ク	ク	ク	101	43	11	72	
7	ク	ク	粘板岩	94	37	16	55	
8	ク	ク	ホルンフェルス	85	79	14	90	スクレイパー
9	ク	尖頭状石器	粘板岩	84	37	10	33	
10	ク	阿石	安山岩	88	68	39	236	磨石兼用
11	ク	ク	ク	134	72	50	459	
12	ク	ク	ク	85	94	49	470	
13	ク	特殊磨石	ク	89	53	56	370	

第VI章 過去の調査経過

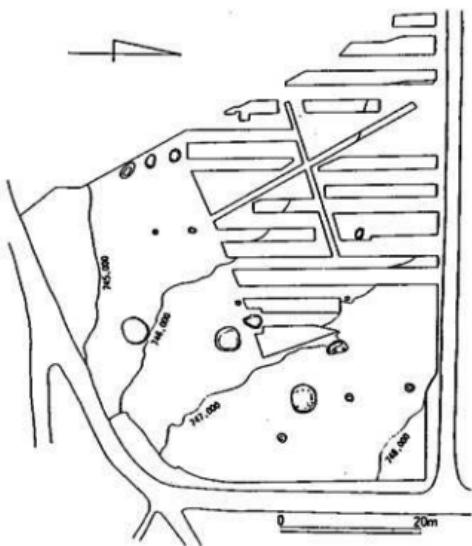
山ノ神遺跡は從来より遺物散布地としてよく知られており、今回の発掘調査以前にも2度にわたり遺跡内で発掘調査が実施されている。

最初は昭和32年8月、当時の片丘村教育委員会の主催により発掘調査が行なわれており、『東筑摩郡誌、第二巻、歴史上』によれば、加曾利E期に属する堅穴住居址2軒と勝坂式、加曾利E式土器、石縄、打製石斧、磨製石斧、敲石、凹石、石皿、石棒、有孔垂飾品、黒曜石が出土している。住居址（第11図）は數mの隔たりをもって位置しており、このうち第2号住居址の遺存状態は良好で完掘されたが、第1号住居址は北壁と床面を確認するにとどまった。第2号住居址は東西5.18m、南北4.98mの隅丸方形を呈する平面形態を有し、主柱穴は4本、中央奥に大形の掘り込み炉をもち、入口部には埋甕が埋設されているといった該期住居址の典型的な形態である。第1号住居址も主柱穴こそ6本であるが大形の石圓炉をもち、また入口部には2個の埋甕が埋設されている。発掘地点の詳細は不明であるが、畜産試験場内でもかなり東側にあたり、今回の発掘地点からは約500m離れている。

2度目は昭和60年4月から8月にかけて、この地に中央道長野線がかかったことにより、長野県埋蔵文化財センターにより緊急発掘調査が行なわれた（1985 長野県埋蔵文化財センター年報2）。調査区は2地点に分かれ、北区は今回の発掘地点の西隣り、また南区はそこから南東へ約300m行った台地縁辺部の南向き斜面である。発掘の結果、北区では陥穴状の土壙1基と先土器時代の黒曜石ブロックが1箇所検出された。また南区では縄文時代中期中葉に位置づけられる堅穴住居址2軒、土壙11基、集石1基、火床3箇所が検出された。



第11図 第1号(左)、第2号(右)住居址（『東筑摩郡誌』より転載）



第12図 南区全体図(『埋文年報2』より転載)

このように過去2回にわたって行なわれた発掘地点はそれぞれ今回の発掘地点と離れており、直接、関係があるのかどうかは疑問であるが、当台地上を現在のように広範囲に山ノ神遺跡と把えた場合、遺跡の時代あるいは遺跡範囲を考えるうえで極めて貴重な資料となろう。

(鳥羽 嘉彦)

第VII章 まとめ

昭和59年度から始まった東山山麓地区農道整備事業に関する塩尻市内の遺跡発掘調査も、今年度に残された最後の山ノ神遺跡の調査報告書を今こうして刊行する運びとなり全調査を終了しようとしている。本線が松本平でも有数の遺跡稠密地帯である片丘丘陵を縦断したにもかかわらず、調査対象の遺跡が5遺跡と少なかったのは、前述したように路線部の標高がやや高かったことによるものである。また発掘調査に及んだ遺跡においても遺跡の中心は免れたため、遺跡の性格を解明するまでに至った成果はなかった。しかし各遺跡から得られた資料は貴重なものが多く、片丘丘陵の遺跡群に幾つかの新知見を加えた。紙面の都合により詳細な成果については後日に改めて検討することとして、ここではもう一度各遺跡の発掘結果を概観してまとめとしたい。

昭和59年度に発掘調査が実施された片丘南内田の山ノ神遺跡からは小窓穴41基とロームマウンド10基が検出された。この中で特に第36号小窓穴からは伏甕が出土しており、この縄文時代中期から後期にかけてみられる屋外葬の典型的な一例は、集落の墓域を抱えるうえで重視された。またロームマウンドについては詳細な分析から風倒木痕説に代表される自然的原因は考え難く、むしろ人為的なものであろうと結論づけられた。

昭和61年度には片丘北熊井の今泉、竹ノ花、中原の各遺跡が調査された。今泉遺跡は、ロームマウンド1基が検出されたのみで遺物も上方からの流れ込みの可能性が強いところから、上方の富士塚遺跡の最末端に位置づけられた。

竹ノ花遺跡からは住居址1軒、ロームマウンド1基、小窓穴13基、墓壙1基が検出された。住居址は縄文時代前期黒浜期のもとで、伴出遺物とともに市内では類例の乏しい貴重な資料となつた。

中原遺跡からは遺構としてはロームマウンド4基、小窓穴7基、ビット1基と他遺跡と同傾向がみられたが、遺物としては縄文前期、中期、晚期、弥生中期初頭、平安と多時代にわたり、それぞれに特色ある資料を提供している。とりわけ縄文晚期、弥生中期初頭の土器の出土は大きな成果であった。最近、塩尻市内でもこの時期の遺物出土が目立つようになってきたが、その出土場所は田川沿辺の低平地に限られ、堂の前、福沢、君石、平出、ちんじゅ、砂田などで遺物が得られているが、中原遺跡のような台地上からの発見は稀である。今後の弥生文化波及期の解明に興味深い資料を提供したといえよう。

今回、調査が行なわれた片丘南熊井の山ノ神遺跡はその良好な立地環境を反映して広範囲に展開しており、遺跡の中心地では最近では珍しく多量の遺物が採取されている。しかし調査対象区付近は遺跡の周縁部と推察され、調査結果も僅少な遺構・遺物を出土したにすぎなかった。ともあれこのように遺存状態が良好な遺跡は近年稀になってきており、願わくば可能な限りで当遺跡が保存されていくことを望むものである。

本報告書が刊行される頃には山麓線も供用開始となっており、また同地区には中央道長野線も今春、開通される。交通の利便が図られれば必ずしやまた土木、建設工事が始まるであろう。あ

ちらこちらで貴重な遺跡が破壊され、その度に緊急発掘調査により地域の歴史の一端が解明されてしまふものの、失った遺跡は決して元へは戻らない。現在は遺跡の宝庫とも言うべき片丘丘陵も、徐々にではあるが蝕まれ、歴史的財産が消えていきつつあるのが現状である。今一度、真剣にその対応策を考えてみることも必要であろう。

日程的に忙しい発掘調査となつたが、これに参加し、御協力いただいた作業員の皆さんには心よりお礼を申し上げるとともに、深い御理解と便宜を図つていただいた松本地方事務所および県畜産試験場の職員の方々には衷心より感謝申し上げる次第です。

(鳥羽 嘉彦)



調査地区発掘前（北側から）



調査地区発掘前（南側から）

図版 2



表土掘下げ作業



遺構検出作業



ロームトレンチ掘下げ



A トレンチ

図版 4



小豎穴・ピット群



2号小豎穴、5、7、8号ピット



調査区全景（北側から）



調査区全景（南側から）

図版 6



器材撤収



道路建設工事（中央の小高い所が発掘箇所）

山ノ神遺跡

—長野県塩尻市山ノ神遺跡発掘調査報告書—

昭和63年3月20日 印刷

昭和63年3月25日 発行

発行 塩尻市教育委員会
